

## 朝鮮人街道のルート

現在の県道は、朝鮮人街道の部分部分をルートの一部として結んだものです。能登川町において古来の朝鮮人街道は、安土町との境の腰越峠より須田の集落を通り、きぬがさやま 織山の裾野を巡った後、安楽寺を過ぎ、県道と交差す



猪子踏切を越え、(株)ツジトミ前を左折(平成9年6月)

る能登川の信号を越え、能登川の町並を過ぎて高岸台の手前で県道と合流します。そして有線放送前の信号を右折して踏切を渡り、(株)ツジトミ前を左折。突き当たりにあるびわこ銀行を右折後、住友生命ビル横の道を左折して、そのまま本町元町通りを過ぎ、垣見天神社横の道をまっすぐ(いまは鉄道で分断されていますが)不二家具の方へ向かって、現在の県道につながっていたようです。



本町区元町通りの現在の様子(平成9年6月)

## 町の玄関口・能登川駅の歩み

駅やバスは町の発展の度合いを見るバロメーターと言えます。駅が活気づいていたり、バスがたくさん発着している町は、同時ににぎわっています。また、同じよう

に駅やバスの歩みを調べれば、どのように能登川が発展したかがわかります。能登川は、周辺の町々に比べて近代の交通の歩みが歴史的に深い土地です。いままであまり注目されなかったこの歩みを少しでも知っていただければ、新たな能登川の歩みと発展の度合いを知ることになると思います。



戦後間もない能登川駅の風景



昭和50年前後の駅の風景



現在の能登川駅舎(平成9年7月)

## 能登川駅誕生の秘話

明治22年(1889)7月1日、東海道本線最後の未開通区間であった湖東線が全通し、同時に長岡(現近江長岡)、米原、彦根、能登川、八幡(現近江八幡)、草津の各駅が開設されました。つまり、能登川駅は他の周辺各駅がまだない頃から早くに存在した歴史深い駅です。

駅の開設理由としては、やはり水の豊かさが大きく影響し、長年能登川駅は、蒸気機関車の大切な給水駅であったのです。プラットホームの上り、下りホームにそれぞれ給水塔があり、蛇腹状の給水ホースによって蒸気機関車の炭水車に水が補給されていました。駅でひとときの休息を得る蒸気機関車の汽笛は、かつての能登川駅を物語るものでした。

それでは、この能登川駅。はじめからいまある位置に駅が開設される予定だったのでしょうか？

実ははじめの候補地は港町としてにぎわっていた浜能登川あたりだったのです。というのは、平坦な地形が、蒸気機関車が休むのに適していたからです。

しかし、調査の結果、地質が軟弱なことが影響して、この計画は却下されました。そのような折にクローズアップされてきたのが、もう一方の候補であった垣見あたり

です。けれども、現在駅になっているこの地は、愛知川の土手に向かう勾配の途中になるため、けっして最良の駅候補地ではありませんでした。

しかし、駅開設の重要性を感じていた垣見の地主であった藤野太平氏によって土地が無償提供され、ことは一気に能登川駅建設へと進みました。まだまだ鉄道への関心が薄かった当時に藤野氏の行動は、まさに先見の明であったと言えるでしょう。

えびす講での様子  
(昭和46年)



現在の様子  
(平成9年6月)

## 能登川駅の今昔

さて、晴れて八幡村垣見と五峰村林の境界に誕生した能登川駅ですが、この能登川という駅名は、八幡村と五峰村の駅名騒動を緩和するため、港町として知名度が高かった能登川村の名を使用し、村どうしのいさかいを和らげようと考えたものとされています。また、開業当時の駅舎やプラットホームは非常に簡素なもので、駅舎の屋根がそのままのびてプラットホームの屋根に使用されていた具合でした。村の境界に建つ駅舎ですので五峰村林からお金を入れて、八幡村垣見から切符が出てくると



奥田製油所の正門風景(年代不詳)

いう奇妙な逸話も残っています。ちなみに、当時の駅舎は現在と違って駅事務所が待合室側にあり、窓口のやりとりがいと反対の向きでした。

はじめは、田んぼの中に寂しく建っていた能登川駅ですが、やがて駅前に近江(奥田)製油の工場が、さらに日本カタン系

(現日清紡)などの工場が進出し、目をみはるにぎわいへと発展していきました。また、大正時代に安土や稲枝の駅が開設されましたが、前記の駅に停車しない列車も能登川駅には停車するなど、まさに地域の交通の要衝として重要な位置を占めていたのです。さらに、五個荘の豪商たちの利用もあって、かなり主要な駅にしか配属されない赤帽という手荷物運搬人が待機していました。このような繁栄の歴史のなか、昭和9年(1934)の室戸台風の際には駅舎が損壊し、改築されたという歴史もあります。改築された駅舎は、屋根の形が当時としてはモダンなものにされ、この駅舎は今も使用されています。

戦後になって、昭和31年には電化を迎え、さらに近年では彦根まで新快速が運転区間を延ばしたことにより、能登川駅も停車駅となって便利になりました。また、新駅舎の計画もあって、今後ますます町の玄関口として発展し、新しい1ページが生まれることでしょう。古き良き時代の能登川駅とともに大切に見守り続けたいものです。



電化を祝う能登川駅(昭和31年)